

英語の呼びかけ表現と日本語の2人称表現： 対人関係標示システムのパラメタ化に向けての素描*

猪 熊 作 巳

1 はじめに

昨今の文法研究では、統語部門独自の形式的特性や設計のみならず、統語部門と意味部門、あるいは統語部門と音韻部門の接点、いわゆるインターフェイスに関わる研究の重要性が増している（Sauerland and Gärtner 2008）。この観点は狭義の意味部門にとどまらず、伝統的に語用部門として扱われてきた種々の現象にも拡張されており、統語部門と語用部門の接点に関する研究も精力的に進められている（Ross 1970、Chierchia 2006、Reinhart 2006）。

本稿では、一般に「呼びかけ表現」¹と呼ばれる表現、そのなかでも特に会話の相手を指示する表現について、日英語間にみられる変異を取り上げる。伝統的に、呼びかけ表現は語用論的、もしくは社会言語学的な枠組みのなかで、ポライトネスや対人関係といったキーワードとともに取り扱われてきた（Brown and Gilman 1960、Levinson 1983、Dickey 1997、小田 2011 など）。Zwicky(1974) は呼びかけ表現 (vocative) の特徴について、以下のように述べている。

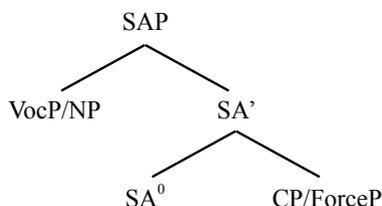
[V]ocative NPs in English are almost never neutral: they express attitude, politeness, formality, status, intimacy, or a role relationship, and most of them mark the speaker [as being in a certain relation to the addressee] (Zwicky 1974: 796).²

一方、呼びかけ表現に対する形式的・統語的な関心はこれまで決して大きくはなかった。一見すると、これは当然のこともうにも思える。呼びかけ表現は、*Oh!*や*Ouch!*などの間投詞 (interjections) と同じく、文頭、文末に付加される (あるいは文中に挿入される) 要素にすぎず、主文を構成する他の要素とこれらの要素のあいだには、統語的關係や制約が課されているようにみえない。ラテン語やギリシャ語にみられる呼格 (Vocative Case; 注1を参照) に関する形態論的研究を除けば、呼びかけ語に対する文法的関心は、言語研究の歴史を通じて高くはなかったとって差し支えないだろう。

2 呼びかけ表現への統語的アプローチ

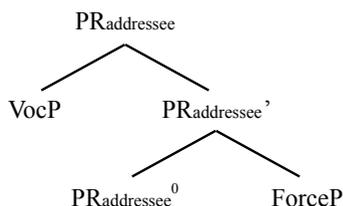
しかし近年、冒頭で述べたような「語用論的關係の統語部門への取り込み (pragmatics-in-syntax approach: Stavrou 2014)」の高まりのなかで、呼びかけ表現を統語的に分析する試みが急増している (Hill 2013、Sonnenhauser and Noal Aziz Hanna 2013; Moro 2003、Corver 2008、Haegeman 2014、Stavrou 2014、Sharmani and Qarabesh 2018など)。これらのアプローチは、Austin (1962) の言語行為論を統語構造におとしこもうと試みたRoss (1970) の流れをくみつつ、それを現代的な統語理論、特にRizzi (1997) 以降のカトグラフィ理論の枠組みを用いて発展させたものと位置づけられよう。端的にいえば、呼びかけ表現は、主文から独立しているわけでも、主文に単純に付加されているわけでもなく、(X'理論的な意味において) 主文の上部に構築される、抽象的³な言語行為句 (Speech Act Phrase; Speas and Tenny 2003) 領域の指定部に生起する、という分析である。

(1)



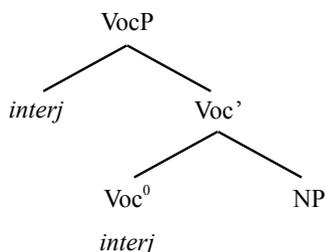
もう少し具体的な例として、Stavrou(2014)の提案をみてみよう。Stavrou(2014)は主に現代ギリシャ語の例に基づき、典型的な呼びかけ表現⁴は言語行為領域の下層、Pragmatic Role_{addressee}(PR_{addressee})句の指定部に生起する、と主張する。

(2)



さらにStavrouは、現代ギリシャ語の呼びかけ表現には決して限定詞(Determiner)が生起しない、という事実をとらえるため、呼びかけ表現に用いられる名詞句は以下のような内部構造を持つ、と提案した⁵。Stavrouによれば、VocはDと統語的に競合する要素であり、この競合関係のために、呼びかけ表現にはDが生起しえないことが説明される。

(3)



(4) Modern Greek⁶

- a. (*art) Maria, Gjorgo, Dimitri, iste oli iperoxi!
 (*art) Maria Gjorgo Dimitri are.2PL all super
 ‘Maria, Gjorgo, Dimitri, you are all splendid!’
- b. (*art) Agapiti fitites, sinadelfi, fili, appose sas kalesame edo …
 (*art) dear students colleagues friends tonight 2CL.PL.ACC invited here …
 ‘Dear students, colleagues, friends, we invited you all here tonight …’
 (Stavrou 2014 : 332)

- (5) a. (*The) Officer, what’s going on here?
 b. How can I help you, (*the) lady?

Stavrouの分析は、Longobardi(1994)やMatushansky(2008、2015)で展開された固有名詞(Proper names)の分析とも符合する。彼らによると、固有名詞は一般名詞と同様、D位置でなくN位置に基底生成され、その後、N-to-D移動、あるいは無形のDとの併合によって、固有名詞特有の意味的・統語的特質が立ち現れる。この分析にのっとれば、固有名詞も本質的にはN要素であり、呼びかけ表現としてVocの補部位置に問題なく生起可能であることも説明できる。

ただしStavrou自身も認めているとおり、この分析案には問題点も数多く残っている。確かにギリシャ語や英語、その他多くのヨーロッパ系言語では呼びかけ表現に限定詞が来ることが不可能であるが、フランス語やルーマニア語においては、一定の条件下ではあるものの、限定詞を伴って呼びかけ表現が生起することが報告されている(Hill 2013 : 63、Stavrou 2014 : 331)。

(6) French

- a. Allons, les amis!
 let’s. go the friends
 ‘Let’s go, friends!’

- b. Amis, ... partons tout de suite!
 friends let's.go right of now
 'Let's go right now, friends!' (Hill 2013 : 63)

また、限定詞は生起せずとも、それに準ずる扱いを受けることの多い指示詞 (demonstrative) が生起する例も報告されている。指示詞がD主要部とD指定部のいずれを占めるにせよ、この例は呼びかけ表現におけるDP領域の存在を示唆する。

(7) Tuscan Italian

- Quei ragazzi, venite qui!
 those boys come_{IMP} here
 'Those boys, come here!' (Longobardi 1994 : 626, footnote 20)

Hill (2007 : 2084) は、ルーマニア語では接尾辞的限定詞、指示詞のいずれもが呼びかけ表現に生起しうることを報告している⁷。

(8) Romanian

- a. Șefa, ce mai e nou?
 boss.the.FEM what more is new
 'What's new, boss?'
- b. Băseșcule, vezi ce faci!
 Băseșcu.the.MASC.VOC see.2SG.IMP what do.2SG.IND
 'Mind what you're doing, Băseșcu!'
- c. Ăl' tânăr/tineréle, un' te duci?
 that young/young.the.VOC where REFL go.2SG
 'Young one, where do you go?' (Hill 2007 : 2084)

さらに、所有句 (Possessive Phrase) を伴った呼びかけ表現は、ギリシャ

語や英語のような、限定詞を呼びかけ表現内に許容しない言語においても可能である⁸。所有句もまた、Abney(1987) 以来のDP仮説においてしばしばDP指定部を占めると主張される。そうであれば、これらの表現も呼びかけ表現の内部構造にDPが含まれることを示唆する⁹。

- (9) a. Come on, my son!
 b. Greek
 Pedi mu kalo!
 child 1SG.GEN good
 ‘My good child!’ (Stavrou 2014 : 335)

呼びかけ表現の内部構造に分析を与えることは本稿の目的ではないのでこれ以上の詳細に立ち入ることは控えるが、一見単純に見える呼びかけ表現が、十分な統語的考察の対象になりうることは感じられたのではないだろうか。

次節では、呼びかけ語の中核的な機能と、呼びかけ表現として生起する名詞クラスという観点から英語の事例を紹介していく。

3 呼びかけ表現の主な機能と名詞クラス

Zwicky (1974) は呼びかけ表現の語用論的機能を大きく二つに分類した (Zwicky 1974 : 787)^{10,11}。

- (10) a. 「呼びとめ (Call)」用法
 ... designed to catch the addressee’s attention
Hey Lady, you dropped your piano.
 b. 「語りかけ (Address)」用法
 ... designed to maintain or emphasize the contact between speaker and addressee
I’m afraid, sir, that my coyote is nibbling on your leg.

両者の区別が困難なケースも存在するが、呼びとめ用法とは、聞き手が話者に気づいていない状況、あるいは話者以外の人やものに気を取られている状況で、聞き手の注意を話者に向けるために用いられる呼びかけ表現である。その性格上、呼びとめ用法の呼びかけ表現はもっぱら発話の冒頭に生起する。一方、語りかけ用法は、すでに聞き手が話者に注意を向けている状況で、その注意を維持するため、あるいは強化するために用いられる呼びかけ表現であり、発話内の生起位置は比較的自由である。

- (11) a. Sir, I'm afraid that my coyote is nibbling on your leg.
 b. I'm afraid, sir, that my coyote is nibbling on your leg.
 c. I'm afraid that my coyote is nibbling on your leg, sir.
 d. I'm afraid that my coyote is nibbling on your leg.

つまり、相手との会話の成立という目的に照らしてみると、語りかけ用法の貢献度は明らかに低く、実のところ、(11d)のように呼びかけ表現を削除しても、文意の面からも情報伝達の面からもまったく問題はない。では語りかけ用法は何を伝えているのか。それは、好感や敬意、あるいは敵意や侮蔑といった、聞き手に対する話者の態度である¹²。このようにみると、呼びかけ表現、とりわけ語りかけ用法が、「ポライトネス (politeness)」や「力と仲間意識 (power and solidarity)」といった語用論的・社会言語学的キーワードとともに注目されることにも合点がいく。

では、呼びかけ表現に用いられる名詞クラスにはどのようなものがあるだろうか。Zwicky(1974)は以下のような例を挙げている (Stavrou 2014: 303-304も参照)。

- (12) a. 2人称代名詞 (2nd personal pronoun) 類
You, Y'all ...
 b. 人名 (personal name) 類
Margaret, Mr. Johnson, Professor Kayne, Grandma Rice ...

- c. 親族名称 (kinship term) 類
Dad, Grandma, Son ...
- d. 職業・職位 (profession/occupation) 類
Professor, Waiter, Driver, Doctor ...
- e. 一般属性 (general noun) 類
Man, Boy, Woman, Kid, Girl, Friends ...
- f. 敬称 (title) 類
Sir, Madam, Mister ...
- g. あだ名・蔑称 (epithet) 類
 - i. 形容詞：*Sweet, Pretty, Gorgeous ...; Slim, Skinny, Red ...*
 - ii. 名詞：*(My) Angel, Honey, Prick, Asshole ...; Jap, Nigger, Honkie ...*

このリストは網羅的ではなく、また分類についても再考の余地がある。例えば田窪 (1997) は日本語の例に基づいて、(i) 固有名詞類、(ii) 2人称代名詞類、(iii) 定記述類 (definite description) の3分類を提出している。この分類にしたがえば、(12c-g) のグループは全て定記述類としてまとめられることになる。また、(12b) に分類している *Mr Johnson* や *Professor Kayne*、*Grandma Rice* といった表現は、それぞれ敬称、職業・職位、親族名称との組み合わせとなっており、これらの例は複数のグループにまたがる特性を持つことが予測される。さらに Zwicky 自身、単複による違いや修飾の可否などといった文法的な面でも語彙ごとに差がみられること、また、同じグループに属すると思われる名詞のあいだでも呼びかけ表現としての使用の可否には差があることを指摘しており (professor 対 associate professor など)、最終的には個々の語彙レベルで指定せざるをえないと述べている。このように様々な疑問が残るものの、呼びかけ表現全般のイメージをつかむには (12) のリストは有効だろう。

この節では呼びかけ表現の機能と名詞クラスについて述べてきたが、最後に両者の関係について少しふれておこう。Zwicky (1974 : 791) は、英語の呼びかけ表現のなかで、呼びとめ用法でのみ使用可能な項目は存在する

ものの、語りかけ用法でのみ使用可能な項目は存在しない、という事実を指摘した。

- (13) a. Hey you, give me that boat hook!
 b. *What I think, you, is that we ought to take the money and run.
- (14) a. Cabby, take me to Carnegie Hall.
 b. *I don't think, cabby, that the Lincoln Tunnel is the best way to go to Brooklyn.
- (Zwicky 1974 : 790-791)

ここからZwickyは、(15) のような一般化を提出している。

- (15) All address forms are usable as calls. (Zwicky 1974 : 791)
- 語りかけ用法で使用可能な呼びかけ表現は全て、呼びとめ用法でも使用可能である。

Zwicky自身はこの一般化に対して説明を試みてはいないが、この節での議論を踏まえると、次のような説明が考えられるだろう。

会話の成立という目的、さらというなら、そもそも会話を開始するという目的に照らしてみると、呼びとめ用法は貢献度が高く、語りかけ用法は低い。語りかけ用法はこの直接的貢献度の低さと相対するかたちで、聞き手に対する話者の心的態度を伝える機能を強く持つ。とすれば、語りかけ用法に使用される表現はそのような話者の心象に関する情報を担いものであるでなければならず、結果、呼びとめ用法に比べて多くの意味情報が要求される¹³。したがって、相対的に意味情報の豊富な語彙項目は語りかけ、呼びとめどちらの用法にも使用可能となる一方、意味情報の少ない語彙項目は呼びとめ用法でしか使用できないこととなる。

呼びとめ用法と語りかけ用法のあいだにみられるこの不均衡を念頭に、(12) に掲げた名詞クラスを考えてみよう。すると、(12a) から (12g) へと下るにしたがって、話者の心象に関する情報量が増していることがみて

とれる。(12a) の2人称代名詞類は、聞き手を指し示す機能のみを持つかなり“純粋な”文法的要素であるのに対し¹⁴、(12g) のあだ名・蔑称類は、話者が聞き手に対して抱く主観的な評価を明け透けに伝えてしまう。上述のとおり語彙ごとに個別的な違いが存在すること、同じクラスに属する名詞のあいだにも年齢や社会的地位といった上下関係が存在することなど、処理すべき問題は残るものの、全体的な傾向は明らかだろう。

ここまでの議論をまとめよう。Zwickyの一般化(15)と(12)の名詞クラスを考え合わせると、呼びかけ表現は、(12a)に近づくにしたがって呼びとめ用法に限られ、(12g)に近づくにしたがって語りかけ用法との親和性が高まることが予測される。

次節以降では、本節で述べた分類に基づきながら、呼びかけ表現の使用に関する日英語のマクロな差異について概観し、その差異と連関する日本語の文法的特徴について論じていく。

4 日本語の呼びかけ表現：英語との対照

日本語にももちろん呼びかけ表現は豊富に存在する。

- (16) a. 君、その道は危ないよ。 <2人称代名詞>
 b. 香乃、はやく起きなさい。 <人名>
 c. お母さん、今日のご飯はなに? <親族名称>
 d. 総理、質問にお答えください。 <職名>

しかし、油井(2007)や東出(2015)も指摘しているとおおり、また、日本語母語話者であれば誰もが感じているとおおり、日本語の呼びかけ表現は、その機能としても、名詞クラスとしても、英語に比べて圧倒的に貧弱である。油井(2007:19)は山岸(1995:159)から以下の例を引用している。

- (17) a. Paul: Hi, Cathy! I've never thought I'd see you here.

Cathy: Hi, Paul. I was thinking the same thing about you.

b. ポール： やあ、キャシー。ここで会うとは思わなかったよ。

キャシー： あら、ポール。私もそうよ。

(油井 2007 : 19 ; 山岸 1995 : 159)

(17a) の英語のやりとり、ならびにその日本語訳である (17b) のやりとりそれぞれに登場する二つの呼びかけ表現のうち、前者の “Cathy” 「キャシー」は呼びとめ用法と語りかけ用法の判別が難しいが、後者の “Paul” 「ポール」は間違いなく語りかけ用法である。油井(2007)や山岸(1995)のいうとおり、このような呼びかけ表現は日本語母語話者には不自然に響く。むしろ、たとえ原語である英語に呼びかけ表現が用いられている場合 (18a) であっても、日本語としてはそれが脱落した (18b) のほうが自然である。

(18) a. Joey: No, it's not weird, it's miracle!

Rachel: It's not a miracle, Joey! I'm sure there's some explanation.

Joey: Oh there is! If you want something enough and your heart is pure, wondrous things can happen!

Rachel: Joey, I really don't ...

Joey: (interrupting her) Can you tell me how this happened?

b. ジョーイ： 変じゃない、奇跡だ！

レイチェル： 奇跡じゃないよ！きっと何かあるよ。

ジョーイ： あるさ！一生懸命願って心が純粹なら、驚くようなこともある！

レイチェル： 本当に違うと...

ジョーイ： (遮る) じゃあ、説明できる？

(油井 2007 : 19) ¹⁵

Honey や *Baby*、*Sweetheart* といったあだ名のクラスにいたっては、対応する日本語表現がそもそも存在せず、無理に使用したとしても、詩的表現や

冗談、あるいはいわゆる「バーチャル日本語」(金水 2003) とみなされるのが関の山である¹⁶。

- (19) a. ハニー、今日はいい天気だね。
 b. 僕と付き合ってくれないかい、ベイビー?
 c. 愛しい子よ、私のそばにいておくれ。

若杉 (2017) は、英語小説 (*The Fault in Our Stars*, John Green, 2012, Penguin) とその日本語訳 (『さよならを待つふたりのために』金原瑞人・竹内茜訳、2013、岩波) を対象に、日英語の呼びかけ表現の使用頻度とそのタイプ分けをおこなっている。その集計結果は表1、表2のとおりである¹⁷。

表1 *The Fault in Our Stars*

(若杉2017: 15 一部改変)

	call		address		call + address	
	count	percentage	count	percentage	count	percentage
2nd personal pronouns	1	0.33%	1	0.33%	2	0.66%
personal names	95	31.46%	121	40.07%	216	71.52%
kinship terms	8	2.65%	22	7.28%	30	9.93%
professions/occupations	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
general nouns	5	1.66%	13	4.30%	18	5.96%
titles	6	1.99%	4	1.32%	10	3.31%
epithets	1	0.33%	25	8.28%	26	8.61%
TOTAL	116	38.41%	186	61.59%	302	100.00%

表2 『さよならを待つふたりのために』

(若杉2017: 18 一部改変)

	call		address		call + address	
	count	percentage	count	percentage	count	percentage
2nd personal pronouns	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
personal names	97	40.08%	112	46.28%	209	86.36%
kinship terms	7	2.89%	15	6.20%	22	9.09%
professions/occupations	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
general nouns	1	0.41%	1	0.41%	2	0.83%
titles	1	0.41%	0	0.00%	1	0.41%
epithets	1	0.41%	7	2.89%	8	3.31%
TOTAL	107	44.21%	135	55.79%	242	100.00%

調査対象がフィクション、さらにその日本語訳という人工的な環境であり、また、若杉(2017)自身の分類基準や集計方法に疑問が残る点が存在するのは事実であるが、そういった誤差を考慮に入れても、本稿の目的にとっては十分有効な結果が得られていると判断する。注目すべき点について、順をおってみていこう。

まず、英語版で総計302例確認された呼びかけ表現が、日本語版では242例と大幅に減少(減少率19.87%)しており、この結果は山岸(1995)や油井(2007)の指摘と一致する。次に、呼びとめ(call)用法と語りかけ(address)用法それぞれの変化についてみると、呼びとめ用法の減少率は7.76%(116例から107例)にとどまる一方、語りかけ用法の減少率は27.42%(186例から135例)と、大きな差がみられる。そこで、語りかけ用法の内訳についてさらに詳しくみてみると、上から4行(2人称代名詞+人名+親族名称+職業・職位)合計の減少率が11.81%(144例から127例)である一方、下3行(属性名詞+敬称+あだ名・蔑称)合計の減少率は80.95%(42例から8例)と、劇的な差をみせている。

若杉(2017)の集計を踏まえると、日本語と英語の呼びかけ表現には、少なくとも以下の三つの大きな違いがあると結論付けられる。

- (20) a. 日本語は英語に比べ、呼びかけ表現全体の使用頻度が有意に低い。
- b. そのなかでも、語りかけ用法における頻度差が大きい。
- c. さらに、話者の心的態度を色濃く表明する名詞クラスにおける頻度差が大きい。

この結果は日本語母語話者の直観に非常によく合致するものだが、その一方、日本語の言語活動という観点から眺めてみると、大きな疑問が立ち上がってくる。英語に比べ、日本語では話者の心的態度や対人距離を表示するような呼びかけ表現が極端に少ない。この事実のみを取り出して額面通りに解釈すると、日本語は話者の心的態度を表明する道具立てが貧弱で、ひいては日本語使用者は他者への配慮という点で鈍感である、という結論

に到達してしまうのではなからうか。次節では、この結論の（非）妥当性について、対人関係標示システムの言語間変異という観点から私見を述べ、本稿を閉じることとしたい。

5 対人関係標示システムの通部門的パラメタ化に向けて

前節では、日本語の呼びかけシステム、特に話者の心的態度を標示する語りかけシステムが英語に比して貧弱であることを論じた。さらにこの事実は、日本語の言語活動自体が対人関係の調節に関して“鈍感”であることを示すのだろうか、という疑問を提示した。多分に思索的なレベルにとどまるが、本節では、この疑問に対する回答を提示し、言語活動一般における対人関係標示手段のパラメタ化に向けたアプローチの骨子を素描したい。このアプローチはいわば、社会言語学的視点、語用論的視点、そして形態統語論的視点を包括する通部門的（inter-componential）アプローチである。

イデオロギー的な言説は慎まなければならないが、上記のように日本語を特徴づけることは、一般に想像されている日本語の特徴と相反するものである。一般的には、日本語は他者への配慮に富み、対人距離の調節という面でも非常に敏感な言語である、ととらえられているといえよう（吉岡 2008、廣瀬・長谷川 2010、滝浦 2017など）。それを象徴する特性の一つが複雑な敬語システムであるが、それとは対照的に、なぜ日本語の呼びかけシステムは英語ほどの複雑さをみせないのか。

その答えは、日本語の名詞システム、ならびに人称システムにあると考える。鈴木（1973）以来広く受け入れられている日本語の名詞システムの特徴として、閉じた機能語クラスとしての人称代名詞の欠落が挙げられる¹⁸。逆にいえば、英語その他のヨーロッパ言語で「人称代名詞」が果たしている文法上の役割は、日本語ではもっぱら語彙名詞句が担っている、ということである¹⁹。

- (21) a. あなたは何が食べたい（ですか）？ 〈2人称（敬）〉
 a'. 君は何が食べたい？ 〈2人称（親）〉
 a". お前は何が食べたい？ 〈2人称（卑）〉
 b. 恵子は何が食べたい？ 〈人名〉
 c. お母さんは何が食べたい？ 〈親族名称〉
 d. おまわりさん／課長は何が食べたい（ですか）？ 〈職業・職位〉
 e. おじさんは何が食べたい？ 〈一般属性〉
 f. 先生は何が食べたい（ですか）？ 〈敬称〉²⁰
 g. 姫は何が食べたい（ですか）？ 〈あだ名〉

(21)の各例はいずれも、下線部の名詞句を2人称として、つまり聞き手を指示するものとして用いた例である。多少のぎこちなさを感じる例もあるが、(12)に掲げた英語の呼びかけ表現に生起する名詞クラスとの類似性は明らかだろう。

つまり、本節冒頭の疑問に対する答えは以下ようになる。日本語は、話者の心的態度や聞き手との対人関係を標示する名詞句表現を欠いているわけではない。英語におけるこれらの表現が、——偽装名詞句のような一部の例外を除いて——発話の周縁部（Speas and Tenny 2003にとってのSAP、Stavrou 2014にとってのPR_{addressee}）にしか生起しないのに対して、日本語ではそれらがもっぱら節内部に項（argument）として生起しているだけである。結果、英語では呼びかけ表現、特に語りかけ表現が多用される一方で、日本語ではその頻度が格段に低くなるのである。

言語活動という広い見地からこの二言語を眺めてみると、次のように述べることができる。いずれの言語においても、「対人関係の標示・調節」という語用論的・社会言語学的機能には違いがない。それを実現するメカニズム——つまり、話者の心的態度を表明する名詞句を認可する機構——が、英語の場合は発話周縁部に備わっており、日本語の場合は節構造内部に組み込まれている、という違いがあるのみである。共通の結果を得るための異なる認可プロセスとしてこの関係をとらえるならば、これはまさに一種

のパラメタである (Chomsky 1981, 1986, 1995 など)。

上の段落で、私は意図的に「周縁部」や「節構造」、「名詞句の認可」といった、統語的な用語を用いた。これは、ここで素描した「パラメタ」概念が表層的な言語間変異を言い換えただけの単なる比喻ではなく、統語理論の枠組みのなかで記述・設計可能なものであることを明確にするためである。

本稿で記した内容はまだ素描の段階であり、形式化のためには、名詞句内部の統語構造と素性構成の明確化、SAP構造の緻密化 (この方向を目指した最近の試みとしては、Miyagawa 2009, 2017 およびその関連文献を参照)、そして名詞句の認可条件の定式化など、課題は数多く残る。しかし、呼びかけ表現という、一見したところなんの関心もそそられないような言語項目が、意味部門や語用部門のみならず、社会言語学的側面にまで統語部門の射程を広げる可能性を示唆するという事実は、控えめにいって非常に刺激的なことではなかろうか。

注

- * この論考は、筆者がこれまで実践女子大学にて担当してきた「社会言語学講義」や「英語学演習」などの授業、特に若杉 (2017) の執筆指導を通じて得られた着想を、NYUにおける筆者の平成30年度国外研修期間中に整理・発展し、書き留めたものである。貴重な研究機会を与えてくださった実践女子大学ならびにNYUの関係者、特にRichard S. Kayne博士に感謝する。この研究成果の一部は科研費 (若手B: 17K18106) によっている。不正確な記述や不十分な理解は全て筆者の責任である。
1. 「呼格 (vocative)」という呼称も用いられるが、この用語は呼びかけに用いられる名詞句表現自体をさす場合と、そのような用法の名詞句が帯びる格 (case) をさす場合が混在する。本稿でもっぱら取り扱うのは前者であるが、誤解を避けるため「呼びかけ表現」という呼称を用いる。
 2. 「英語における呼びかけ表現名詞句が (対人関係を示唆しない、という意味で) 中立的であることはまずありえない。呼びかけ表現は、話し手の態度やポライトネス、格式さ、社会的地位、あるいは相手との親密さや立場関係などを表示し、ほとんどの場合、話し手 (が聞き手とある特定の関係性にあるということ) を標示する。」(著者による訳)

3. ここでの「抽象的」とは、(多くの場合)音形を持たず、発話に現れないものの、統語構造としては存在する、程度の意味である。
4. Stavrou (2014) は呼びかけ句を (i) のような間接的呼びかけと (ii) のような直接的呼びかけに分類した。
 - (i) (Oh) my God, look what he's doing!
 - (ii) Tom/My dear, look what you're doing!
 (i) のような間接的呼びかけでは、呼びかけ表現は眼前に存在する実際の対話者を指し示すわけではなく、むしろ驚きや落胆といった、話者の心的態度を表示する、ととらえる。対して (ii) のような直接的呼びかけにおいては、呼びかけ表現は実際の対話者を指し示す。本論考では、もっぱら後者の呼びかけ表現を典型的なものとして考察の対象とする。
5. VocP = Vocative Phrase、interj = interjection。Stavrou (2014) は、歴史的起源を参考にしながら現代ギリシャ語の間投詞 (interjection) をさらに二つのグループに分けたが、ここでは立ち入らない。またStavrouはVocの補部位置に生起する範疇をNPと表記しているが、これは便宜的なものであり、DPとNPの中間に生起するNumPなどの要素を排除するものではない。
6. 現代ギリシャ語では、固有名詞であっても項位置に生起する場合は義務的に限定詞を伴う。
 - (i) a. Petro, I Maria -s agapa.
 Petervoc the Maria -CL.2SG.ACC love.3SG
 'Peteri, Maria loves youi.' (Stavrou 2014 : 310)
7. ただしHill (2007) は、これらの限定詞および指示詞の生起は義務的ではなく、随意的なものであると述べている。
8. この文脈で、Corver (2008) がevaluative vocativeと呼び、Julien (2016) がpossessive predicational vocativeと呼んだ (i) のような表現も視野に入るが、ここでは取り扱わない。英語訳からもわかるとおり、これらの所有句は「所有」の意味を有しておらず、むしろ同格的表現を構成していること、またこれらの言語では形態的に呼格を判別することができないことなどを考え合わせると、これらの事例を本論文で取り扱っている典型的呼びかけ表現と同一視することに疑問が残るためである。英語の*You idiot!*も含めたこれらの表現は、Collins and Postal (2012) の偽装名詞句 (imposters) との関連性を想起させるが、これは今後の課題とする。猪熊 (2016) も参照。
 - (i) a. Swedish
 Det är fejk, er-a idioter!
 it is fake yourPL.POSS-PL idiots
 'It is fake, you idiots!' (Julien 2016 : 97)

b. Norwegian

Din (forbanna) idiot!

your (damned) idiot

'You damned idiot!'

(Corver 2008 : 86)

9. ただし、指示詞についても所有句についても、DP領域に基底生成するのではなく、NP領域（あるいはDPとNPの中間領域）に基底生成されたのち、必要に応じてDP領域へと移動する、とする分析も多くみられる（Leu 2015など）。このような分析を採用すれば、本文で紹介した各例は、必ずしも呼びかけ表現におけるDP領域の存在を証拠づけるものではなくなる。実のところ、同様の問題は固有名詞が呼びかけ表現に用いられる際にも生じる。すなわち、固有名詞の指示性、さらには固定指示性（つまりrigid designatorとしての固有名詞；Kripke 1980、Longobardi 1994）を保証するものがDP領域であり、かつ、呼びかけ表現がDP領域を持たないとするならば、呼びかけ表現に生起する固有名詞は（固定）指示性を持たないことが予測されるが、これは明らかに事実と反するのである。
10. 高橋（1989）はCallを「呼びかけ」、Addressを「語りかけ」と訳出しているが、本稿ではVocativeを「呼びかけ表現」と訳出しており、混乱を避けるために前者に「呼びとめ」、後者に「語りかけ」という訳語をあてることにする。ちなみに高橋（1989）はVocativeを「呼格」と訳している。
11. 小田（2011:47）も同様に、「会話運営機能（Call）」と「対人関係機能（Address）」という二分類を提出しているが、筆者の理解する限り、Zwicky（1974）とは異なる定義を採用しているように思われる。ZwickyにとってのCall用法とAddress用法は、小田にとってはいずれも会話運営機能の下位クラスに分類される。小田は、会話運営機能とは別の次元の区別として対人関係機能を設定している。すなわち、東出（2015:66）が指摘しているとおり、「ある1つの『呼びかけ語』が同時にいくつかの機能を備えていることもある」。呼びかけ表現の分類については、語用論、談話分析、社会言語学などの見地からさまざまな分類が提案されており、それらの包括的整理は筆者の力の及ぶところではない。
12. Shaden（2010 : 182）は、語りかけ用法は「交感的次元（phatic dimension）」を強調する、と述べている。
13. この捉え方は、呼びとめ用法に用いられる語彙項目が、語りかけ用法に用いられる語彙項目に比べて聞き手の注意喚起能力を高く持つ必要がある、ということを含意しない。本質的に、呼びとめ行為を成立させるために要求される特定の語彙的特徴などというものは存在しない。このことは、呼びとめ行為自体は *Hey!* や *Pardon* といった間投詞的要素や、さらには口笛や咳払い、

ジェスチャーといった非言語行為でも可能である、という事実から明らかである。もちろん、どのような行為をおこなうかということ自体が他者への心的態度を表示してしまう側面もあるが（人を呼ぶときに名前を呼ぶか、手を叩くかによって、相手の受ける心象は大きく異なる）、この問題は本稿の射程を大きく超える。

14. 2人称代名詞のなかでも、フランス語にみられるtuとvousのような親称と敬称の対立が存在するが、ひとつひとつの項目の記述は本稿の目的にとって重要ではないので、わきにおく。
15. データ採集元の資料情報については油井（2007）を参照。
16. ただし一方で、侮蔑的クラスは日本語でもしばしば呼びかけ表現として使用される。
 - (i) a. おいバカ、どこ見てるんだよ。
 - b. そんなにこわがるなよ、(この) いくじなし。

現段階ではこれらの事例に対して満足のいく説明を持ち合わせていないが、英語の*You idiot!*やオランダ語などのevaluative vocative (Corver 2008, Julien 2016) との類似性が想起される。また、中立的な状況で、(ii-a) のような呼びとめ用法が不可能であるという事実とZwicky (1974) の一般化（本稿（15）を参照）を考え合わせると、これらの表現は呼びかけ表現ではなく、全く別の分析を必要とする、という可能性が示唆される。

- (ii) a. *バカ、早くこっちに来なさい。
- b. 相太、早くこっちに来なさい。
17. 表中の名詞クラス7分類は、本稿第3節（12）の分類にほぼ合致する。若杉（2017）は比較のため、日本語で書かれた小説（『海辺のカフカ（上）』村上春樹、2002、新潮文庫）とその英語訳についても並行的な調査をおこなっているが、ここでは割愛する。
18. ただしInokuma（2012）は、形態統語的にみられる振る舞いの質的違いに基づき、日本語においても代名詞類を語彙名詞類と区別する必要があることを論じている。
19. この違いをとらえるため、鈴木（1973）は「自称詞・対称詞・他称詞」という用語を導入した。日本語の自称詞・対称詞に対する形態統語的分析の試みについては、猪熊（2016）を参照。
20. 「先生」は一般に「教員」と同義であると捉えられがちだが（Inokuma（2012）もそのように扱っていた）、教員に限らず、医師や弁護士、政治家など、しばしば社会的に地位が高いとみなされる職業・立場の人物に対して広く使用されるため、ここでは〈敬称〉に分類している。

引用文献

- Austin, John L. (1962) *How to Do Things with Words*, Harvard University Press.
- Brown, Roger and Albert Gilman (1960) "The Pronouns of Power and Solidarity," *Style in Language*, ed. by T.A. Sebeok, 253-276, Technology Press of MIT.
- Chierchia, Gennaro (2006) "Broaden Your Views: Implicatures of Domain Widening and the "Logicality" of Language," *Linguistic Inquiry* 37, 535-590.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press.
- Collins, Chris and Paul Postal (2012) *Imposters: A Study of Pronominal Agreement*, MIT Press.
- Corver, Norbert (2008) "Uniformity and Diversity in the Syntax of Evaluative Vocatives," *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 11, 43-93.
- D'Hulst, Yves, Martine Coene, and Liliane Tasmowski (2007) "Romance Vocatives and the DP Hypothesis," *Studii de Lingvistică și Filologie Romanică: Hommages Offerts à Sanda Reinheimer Rîpeanu*, ed. by A. Cunita, C. Lupu and L. Tasmowski, 200-211, Editura Universității din București, Bucharest.
- Dickey, Eleanor (1997) "Forms of Address and Terms of Reference," *Journal of Linguistics* 33, 255-274.
- Haegeman, Liliane (2014) "West Flemish Verb-Based Discourse Markers and the Articulation of the Speech Act Layer," *Studia Linguistica* 68, 116-139.
- 東出朋 (2015) 「日本語の呼びかけ語の機能：会話管理の観点から」『地球社会統合科学研究』3号, 63-76.
- Hill, Virginia (2007) "Vocatives and the Pragmatics-Syntax Interface," *Lingua* 117, 2077-2105.
- Hill, Virginia (2013) *Vocatives: How Syntax Meets with Pragmatics*, Brill.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2010) 『日本語から見た日本人：主体性の言語学』開拓社。
- Inokuma, Sakumi (2012) "Redundant *Hito*, Polite *Kata*, and Derogative *Yatsu* in Japanese: Human-Denoting Light Nouns as a Window into Noun Phrase Structure," *Linguistic Research* 28, 75-110, University of Tokyo English Linguistics Association.
- 猪熊作巳 (2016) 「日本語名詞表現の形態統語的性質に関する覚書：人称素性の側面から」『実践英文学』68号, 91-116.
- Julien, Marit (2016) "Possessive Predicational Vocatives in Scandinavian," *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 19, 75-108.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波。

- Kripke, Saul A. (1980) *Naming and Necessity*, Harvard University Press.
- Leu, Thomas (2015) *The Architecture of Determiners*, Oxford University Press.
- Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press.
- Longobardi, Giuseppe (1994) “Reference and Proper Names: A Theory of N-Movement in Syntax and Logical Form,” *Linguistic Inquiry* 25, 609-665.
- Matushansky, Ora (2008) “On the Linguistic Complexity of Proper Names,” *Linguistics and Philosophy* 31, 573-627.
- Matushansky, Ora (2015) “The Other Francis Bacon: On Non-Bare Proper Names,” *Erkenntnis* 80, 335-362.
- Miyagawa, Shigeru (2009) *Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-Based and Discourse-Configurational Languages*, MIT Press.
- Miyagawa, Shigeru (2017) *Agreement beyond Phi*, MIT Press.
- Moro, Andrea (2003) “Notes on Vocative Case: A Case Study in Clause Structure,” *Romance Languages and Linguistic Theory 2001*, ed. by Jan Schroten, Petra Sleeman and Els Verheugd, 251-265, John Benjamins.
- 小田希望 (2011) 『英語の呼びかけ語』大阪教育図書。
- Reinhart, Tanya (2006) *Interface Strategies: Optimal and Costly Computations*, MIT Press.
- Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of Left Periphery,” *Elements of Grammar: Handbook in Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer.
- Ross, John R. (1970) “On Declarative Sentences,” *Readings in English Transformational Grammar*, ed. by R.A. Jacobs and P.S. Rosenbaum, 222-272, Ginn and Company.
- Sauerland, Uli and Hans-Martin Gärtner (eds.) (2008) *Interfaces + Recursion = Language? Chomsky’s Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, De Gruyter Mouton.
- Shaden, Gerhard (2010) “Vocatives: A Note on Addressee-Management,” *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 16(1), 176-185.
- Sharmani, Mohammed Q. and Mohammed Ali Qarabesh (2018) “Vocatives: Correlating the Syntax and Discourse at the Interface,” *Cogent Arts & Humanities* 5, 1469388.
- Sonnenhauser, Barbara and Patrizia Noel Aziz Hanna (eds.) (2013) *Vocative! Addressing between System and Performance*, De Gruyter Mouton.
- Speas, Peggy, and Carol Tenny (2003) “Configurational Properties of Point of View Roles,” *Asymmetry in Grammar*, ed. by Anna-Maria Di Sciullo, 315-344, John Benjamins.
- Stavrou, Melita (2014) “About the Vocative,” *The Nominal Structure in Slavic and Beyond*, ed. by L. Schürcks, A. Giannakidou and U. Etxeberria, 299-342, De Gruyter.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波新書。
- 高橋英光 (1989) 「命令文と話者の認識的立場」『北海道大學文學部紀要』38 (1), 47-61.
- 滝浦真人 (2017) 『日本語敬語および関連現象の社会語用論的研究』博士論文, 北海

道大学.

田窪行則 (1997) 「日本語の人称表現」『視点と言語行動』田窪行則編, 13-44, くろしお.

若杉沙紀 (2017) 「日英の呼びかけ語: address用法から見る対人距離」卒業論文, 実践女子大学文学部英文学科.

山岸勝栄 (1995) 『日英言語文化論考』こびあん書房.

吉岡泰夫 (2008) 『対人コミュニケーションの社会言語学的研究』博士論文, 大阪大学.

油井恵 (2007) 「日本語および英語における対象詞の機能: ポライトネスとの関連性」駿河大学論叢33, 19-30.